

【研究協議会趣旨文（案）】 中学校・高等学校国語科におけるあたらしい授業づくりへの取り組みと課題

平成 28 年から平成 30 年にかけて改訂された中学校・高等学校学習指導要領の施行が、高等学校最終学年にまで及ぶ年度となりました。早くも中学校国語科については改訂された国語教科書の見本本が揃う時期にさしかかり、高等学校においても必履修科目「言語文化」「現代の国語」教科書の改訂作業にそれぞれの教科書会社に取り組む時期となりました。

本学会の研究協議会では、コロナ禍の影響の続くなか開催された令和 4 年度に新しい学習指導要領による「あたらしい授業」をどのように進めるか、令和 5 年度に高等学校の「現代の国語」「言語文化」の学習指導、それぞれに関するご提案と議論を行い、その成果は学会誌『国語教育研究』に掲載されています。

現在は、日々の授業を進める上で何が達成されて、どういう課題が残されているのかということの本格的に議論し、これからの国語科教育をどのように展開すればいいかを検討する時期であると考えます。令和 6 年度は、中学校・高等学校国語教科書における「読むこと」の新教材と授業づくりに関するご報告をいただき、議論を展開することになっております。一方で、「走れメロス」「羅生門」「夢十夜 第一夜」「水の東西」等、従来扱われてきた国語教科書「定番」教材は中学校・高等学校ともにその多くがいまも使われています。しかし、「社会に開かれた教育課程」を目指しているのが現在の学習指導要領であり、その大きな特徴でもあります。新旧教材がどのように生徒の将来につながる学習の契機になるかということを見極め、授業づくりにあらたに取り組んでいけばいいのか。令和 7 年度の研究協議会ではこのことに取り組んでいきたいと考えます。

どうすればいいか。たとえば次のように考えることができるのではないのでしょうか。

カリキュラムや授業を「社会に開かれた」ものにするということは実用的なことをそのまま知識として習得させればいいということではないと思われまます。その学習者が生きていくための原動力を授業で育てることが必要です。そのためには、いい教材を提供しているのだから教師や生徒がそれに合わせていくのが学ぶことであるという考え方から、自分が何に対してどのように取り組めばいいか、夢中に取り組むことになぜ価値があるのかということ、生徒がわかるような授業を仕組むという考え方に転換していく必要があるのではないのでしょうか。教科書のなかに書かれてあることを生徒が自分のものにしたいと思わなければ、そこで学んだことは記憶に残りません。夢中に取り組むからこそ、学んだことは私たちの記憶に残ります。夢中で取り組むために重要なのは選ぶことです。学んだり、活動したり、お互いに関わり合うなかのどこかで自ら選ぶことがあれば、その学びはほんもの(authentic)に近づくと思われまます。ほんものの学びだからこそ、学習者は本気になり、学んだことを自らの人生のなかでいかすことができるようになります。そうした学びを国語科で経験させるためにはどうすればいいのか、夢中で取り組ませるために必要な条件はどのようなものか。課題はどこにあるのか。令和 7 年度の研究協議会ではこうしたことを皆様と議論し、あたらしい授業づくりのための指針を共有できれば幸いです。